

日本短波クラブ誕生秘話

JSWC 会員番号 107 大武 逞伯

日本短波クラブは1952年の創立で、当時東北大学の学生だった小川昭さんと和田謙郎さんがスタートさせました。最初から世界で通用する国際的なクラブにしようと月刊の会誌は英語で印刷されました。当時はガリ版印刷というのが安価な方法で、油性の原紙にタイプを打って孔を明け、ここをインクが流れて印刷される仕組みでした。

こういう経緯から初期のクラブ会員は外国人が多く、年会費が1ドル(360円)以下という安さもあって、どんどん入ってきました。しかし、国内会員からは不評で、やはり日本語のニュースが欲しいということになり、1年後から国内放送ニュースを中心とする日本語版も発行されるようになり、短波ニュース中心の英語会誌「SW-DX Guide」と二本立てとなりました。これがラジオ雑誌で紹介され、私が入会したのは1953年の秋でした。当時の国内会員の会費は300円、それでも小遣いには負担が大きく、半年ごとに150円を払っていました。



1959年春、全国の会員を訪ねて
ミーティングを行った時の1シーン

1956年4月に東北大学に進学し、故郷の水戸を離れて大学の寮生活を始めました。寮はクラブの本部がある和田さんのお宅から歩いて数分の所にあり、大学の近くにあった郵便局の私書箱を放課後に開け、郵便物をクラブへ届けるのが日課になりました。夕食を済ますと和田さん宅へ行き、事務整理と会誌の原稿書きに勤しみました。和田さんの家には大きな木に竹柱が括り付けられていて、そのてっぺんからアンテナ線が引き込まれていました。これを建てるには軽業的な作業を要したそうですが、このアンテナからは、夜な夜なAIRのインド伝統音楽が流れて来て、これを聴きながら事務作業をしていました。当時、事務作業で一番大変だったのは、会誌発送用の封筒の宛名書きで、数人で手分けして書いても数時間はかかりました。やっと原稿を書き上げて印刷に回し、ほっとする時間もなく、宛名書き、印刷上りの会誌の封筒詰め、そして発送でした。封筒詰めは印刷屋さんが勤務の終わった後、事務室を借りて数人でやるのですが、数百人分の会誌は積み上げると人の身長を超えたので、和田さんが感慨深げに「会員が増えたナー」と言っていたのを思い出します。1957年のクラブ5周年の際は、外国の多くの局がクラブのために「特別放送」を流してくれました。クラブも特別ペリを準備しましたので、世界的な反響を呼び、私書箱に入りきれない航空郵便がスーパーの籠のような郵便ケースに山盛りになって渡される程でした。

私は就職に伴い1960年に首都圏に引っ越し、その後のクラブは白石会員を中心とする人たちの手で続けられました。BCLブームの時代に東京中心で運営した時もありましたが、戻つばみになり、また仙台に戻って繁栄の時代を取り戻しました。しかし、スタッフの老齢化などもあって仙台での運用が困難になり、2008年から鎌倉に本部をおいています。そして理事会の発足で透明な運営が行われるようになり、多くの会員の支持を受けて、会誌の定期発行の他、毎夏のハムフェア出展など健全な活動が続いています。

今回、久しぶりに和田さんと昔話にふけりましたが、相変わらずお元気な和田さんの様子が伺え嬉しく思いました。完璧主義、理想主義の和田さんが、今でも地域の健康増進に献身的な活動をされているのには本当に頭が下がります。

注：記事は2015年12月発行の復刻版です。

サタデー・トーク

バイブル・トーク

きき手 尾崎一夫 毎週土曜日放送		淀橋教会 峯野龍弘主管牧師 毎週日曜日放送	
7月02日	マリンバの調べ (アイダ行進曲他)	7月03日	聖書遊覧バス (出エジプト記16章)
7月09日	女ばかり南米大陸をゆく (7) エクアドル篇	7月10日	聖書遊覧バス (出エジプト記17章)
7月16日	日本短波クラブ創立70周年記念座談会 (1)	7月17日	リスナーからの「お便り交換の時間」
7月23日	日本短波クラブ創立70周年記念座談会 (2)	7月24日	聖書遊覧バス (出エジプト記18章)
7月30日	日本短波クラブ創立70周年記念座談会 (3)	7月31日	聖書遊覧バス (出エジプト記20章)

放送後の番組は、ホームページ(<http://japanese.reachbeyond.jp>)のトップページ左側メニューにある『インターネット放送』のリンクページからお聴きいただけます。(mp3形式)

放送時間：日本時間 午前7時半~8時 15410kHz (再放送) 午後8時~8時30分 15.565kHz
(米国アリゾナ州制作/オーストラリア送信)

